

## **【編集後記】**

遅ればせながら、ジャーナル 2012 年度第 2 号をお届けする。2013 年度には、是非クォーターリーとなることを期したいと考えているが、研究予算の貧困がそれを難しくしている。この貧困とは、物理的な単純経費の問題ばかりではなく、研究人士育成への余裕のなさを表現しているのだが、ここ数年中国の高等研究機関にはマルクス主義関係講座のポストが増えているそうである。こちらもそうした「余裕」を欠いている様子である。胡錦濤体制の確立期に「中国的社会主義」の理論化を強化し、政治体制自体のイデオロギー基盤を再構築していくことが、その目的であったようなのであるが、どうも知的先進部分がそこに集結するという具合にはなっていないばかりか、ポストドク研究員で思い通りに研究ポストをえられないでいる人が専門をややずらして仕方なくマルクス主義関係ポストをうるといった状況なのだそうである。欧米の高等研究機関の先端部分が複雑な金融商品開発へ誘われていくのと同じことで、どうやら現代世界の知性は、「世界の存立構造とその意味」を問うことをしない〈知的退嬰〉の局面にあるようだ。19 世紀末におけるそうした退嬰を打破する機能を果たしたのはマルクス主義に他ならなかったが、21 世紀においてはそこにすら根拠をもてない悲惨さをわれわれは生きなければならない。もし、中国が、「中国的」社会主義などといった小さく纏まる傾向性を打破して、高等研究機関のさまざまな資源を全世界の有能な知性に開放しつつ、「19 世紀マルクス主義を継承する人類解放の新たな世界秩序と規範の構築」へと誘う方向性を打ち出せたなら、「帝国主義の時代」の最後の封印を為すことになるはずであるのだが……。 (N)